

## キソウテンガイの開花について

濱谷修一・西山岩平

サボテン温室内に植栽している *Welwitschia mirabilis* (キソウテンガイ) が、当園において初めて開花したので、報告する。

当園では、1978年のサボテン温室完成以来、温室内にてキソウテンガイを植栽・展示していた。しかし、この株は1995年頃から調子が悪くなり始め、同年秋頃に落葉・枯死した。その原因は、乾燥地の植物であることにこだわり、灌水を控えすぎたためと、植栽場所が落葉性樹木の下だったために、夏季の日照量が少なかったためであると考えられた。

そこで、翌1996年秋に、兵庫県内の業者から



写真1. 開花状況 (1998年7月13日) 晩秋から早春

新たに1株 (種子から栽培し、20年以上経った株) を導入し、1997年5月に、温室内のよく日光が当たる場所に植栽した。灌水は、土壤表面が乾いたらたっぷりと水を与え、

を除く季節の晴天時には、夕方 (夏) または朝 (夏以外の季節) に1日1回、葉水を与えるようにした。また、定植時、掘った穴の底から、温室内の水路の漏水と考えられる湧き水が確認されており、この水も、少なからず植物に利用されていると想像される。

### 蕾の発生から開花まで

1997年5月上旬に、茎の上部、すなわち、2枚ある葉のつけねの間の、固い部分からマッチ棒状の蕾が出ていることに気がついた。このとき、花茎 (マッチ棒の軸にあたる部分) は1本で、その長さは約2cmであった。花茎の先端には、花序が2個以上あることが確認された。その後、花茎は約6cmまで、花序長は約1.5cmまで長くなった (写真1)。最終的に花序は4個であった。花序はマツカサ状をしており1花序あたりの小花数は20以上であった。同年7月13



写真2. 開花時の花序 (1998年7月13日)

日に最初の小花の開花を確認した (写真2)。小花は、花茎に近い方から順に咲き始め、1花あたりの寿命は1日未満であったが、すべての小花が咲き終わったのは8月中旬であった。なお、この株は雄株であった。

## 一般入園者に公開した野生ラン

濱谷 修一

1997年3月15日から、以前、ベゴニア温室として使用していた温室を「フクシア温室」として改装オープンした。この温室には、フクシアと共に、野生ランの開花株を展示している。筆者は当園栽培記録第19号において、1997年3月

から11月までの野生ランの展示状況を報告した。今回は、その続編である。

昨年の反省から、担当者の主観で珍しいと思われる種類については、ラベルに「珍」シールを貼るなど、表示に工夫を加えた。また、展示中の植物リストを温室内に掲示するようにした。その結果、一部の入園者からは、「このランは珍しいらしい」「もっとゆっくりと見てみよう」という声も聞かれるようになってきている。今後さらに、属または種ごとの特徴の解説を充実して